

第1章

太陽の國出雲(地球ユートピアモデル事業)の目的

今を生きる人間の義務と責任

民族や宗教、地域や国家間の衝突・紛争、環境・食糧・エネルギー問題、極端なマネー至上主義経済、そして人心の荒廃――。

21世紀を目前にして、人類は国内では解決不可能で、国家間さらには地球規模で取り組まなければ解決できない様々な危機に直面しています。人類全体の存亡にかかわるこれらの危機を克服し、次の時代を担う子供たちに、豊かで生きがいのある21世紀社会のフィールドを提供することは、子孫に対する、今を生きる人間の最大の義務と責任です。

人類究極の目的に向かって

「天寿が全うでき、楽しく愉快に持続的に生きられる地球社会の創造」。

この人類究極の目的に向かって、応分の役割を担うことが、21世紀において「共生できる人間の条件」であると考えます。

今こそ歴史に学び、人間の定義に思いをはせ、哲学と自然の摂理に調和した社会に向けて、パラダイムシフト(飢餓と殺戮のない社会をつくるための枠組から、楽しく愉快に持続的に生きられる社会の枠組への転換)が必要です。

20世紀、飢餓と殺戮の恐怖を克服するため資本主義経済の仕組が構築され、科学・技術が急速に進歩し、その間いくたびかの世界規模の戦争を経て、今日の物質的に豊かな社会が築き上げられました。

ところが、とくに日本では、飢餓と殺戮を克服した後も同じ枠組が続いたため、平和の中で大量生産・大量消費・大量廃棄の傾向が強まり、今や自然の摂理と著

しく乖^{かい}離した社会になっています。

「物づくりとその普及のための社会の枠組づくり、人づくり」から、「楽しく愉快に持続的に生きられる人づくりのための社会の枠組づくり、事おこし、物づくり」への転換なくしては、21世紀の地球社会は持続不可能であることが、誰の目にも明らかに認識されるに至りました。

このパラダイムシフトを推し進めるため、今までの経過・現状認識と目的を共有し、歴史的・地政学的な背景に照らす中から使命観が生まれる、新たな事業を起こす必要があります。

事業のプロセスに感動を蘇らせ、「自己本位から他者への思いやりと共生へ」、「利己主義から利他主義へ」と人間の心の進化を促し、人類究極の目的に向かって自己発展していく「場」と「仕組」を、出雲の地につくることによって、全国、世界へ「人物」を輩出していく——これが本構想の趣意です。

1200兆円の金融資産を流動化させる ビッグプロジェクト

現在、日本の個人金融資産は200兆円、負債を差し引いた正味でも900兆円といわれています。このうち、東京・神奈川・埼玉の首都圏1都2県で、10億円以上の不動産を所有する4万人強の資産家が200兆円以上の金融資産を保有しているとの試算があり、富が一部の資産家に集中していることがうかがえます。

「ゼロ金利時代」の到来で銀行預金離れが起きつつある一方、最近「金」投資がブームになっています。それ自体としては何の価値も生み出さない「金」にマネーが向かい始めていることは、個人の資金が投資先を見出しかねていることを示しているといえます。

1998年12月19日に経済企画庁・自治省から「緊急経済対策」が新聞発表されました。この対策の一環に本プロジェクトを位置づけることができれば、「太陽の國出雲」構想に火が点き、1200兆円の金融資産流動化のきっかけとなり、バブル崩壊以降長い間求められていた景気反転の起爆剤として大きな役割を果たすことが期待できます。日本の内需拡大を求める海外の声にも応えることもできます。

そして、本プロジェクトの進行にともない、新たな時代を拓く「人物」を輩出し、ネットワークの輪が全国・世界に向けて広がっていくことは疑いありません。

「あらゆる財産と富は、正義に則し、人類の進歩のために責任をもって使われなければならない」。シュミット元首相ら国際政治家グループが提案している『人類の責任に対する世界宣言』案の中の条文です。

日本は、江戸時代、地政学と歴史を巧みに活用した制度と施策により世界に例のない独特の文化を生み出しました。そして明

治以降、富国強兵・殖産興業を追求し富を築き上げましたが、その負の部分が次第に表面化、太平洋戦争に突入、そして敗戦によってその富は灰燼に帰しました。

しかし、アメリカの世界戦略の枠組の中、戦後復興、朝鮮戦争の後方支援、東西冷戦の前線基地、ベトナム戦争の補給基地という経過と、日本人の勤勉な努力とがあいまって奇跡的な経済発展をとげ、日本は世界第2位の経済規模の国になりました。

本来は、敗戦後ある程度国民生活が安定した段階で、人類が同じあやまちを繰り返さないよう、当事国として関係諸国に協力を仰ぎ、戦争に至る背景、原因、経緯を研究・議論、共通認識を深め、人類共有の知的財産構築をめざすべきでした。

しかし、戦後50年余を経た今日までその作業を怠ってきたため、いまだ歴史のくびきから解放されず、解決の糸口さえつかめていないのが現状です。今日の教育の混乱、子供たちの異常行動の遠因もここにあるのではないのでしょうか。

世紀末の今こそ、そういう経緯の上に蓄積されてきた富を用い、人間としての義務と責任を果たす最後の機会と考えます。

この機会に行動を起こさなければ、今を生きる我々は「人間としての基本的な要件を備えていない」という、世界各国および我々の子孫からの指弾を免れません。

人類の特性と人間の定義を考察する中から生まれた、人類が共有する究極の目的「天寿が全うでき、楽しく愉快に持続的に生きられる地球社会の創造」に向か



(日本経済新聞 H10.12.19)

って、今こそ一人ひとりが、自分の拠って立つ基盤、状況に応じた役割を担うときです。

生命と衣食住の保証を前提に、主権在民、基本的人権の尊重、自由（移動と言論）を基盤とするなかで、「天寿が全うでき、楽しく愉快に持続的に生きられる地球社会の創造」という目的を追求することによってのみ、競争と共生が矛盾なく両立でき、社会に平和と活力と信頼関係がもたらされる。そのプロセスにおいて人類進化のサイクルが始まる。科学・技術が急速な発展をとげた20世紀末、人類誕生以来初めて、その環境が整ったと考えます。

21世紀を切り拓く本プロジェクトをスタートさせることによって、世紀末の閉塞感を打破、共に、新しい歴史の第一歩を踏み出そうではありませんか。